



Title : 感想文敬遠症の治しかた

❖ 誰も借りてくれない本

6月17日、秋田市で秋田県図書館協会総会と秋田県図書館大会が開催されました。総会では協会表彰も行われ、大館市立図書館からは2名の職員が規定の勤続年数を満たし、かつ図書館業務への貢献を評価されて表彰を受けました。

図書館大会は、基調講演と県内図書館からの事例報告で構成されます。基調講演は毎年、全国的に著名な研究者や図書館員が登場します。今年の講師は図書館PRの専門家、仁上幸治氏。先進的な事例をいくつも取り上げた、とても興味深い講演でした。

その中で、これはやってみたいと思ったのが「誰も借りてくれない本フェア」というもの。2年前に国際基督教大学図書館が開催し、多くのメディアに取り上げられた図書館展示です。ある意味自虐ネタのようですが、せっかく利用者に読んでほしいと購入した本ですから、改めて目を向けてほしいという思いを形にするには良いアイデアだと思います。

ところで、図書館の貸出方式もいろいろ変化しています。今でも学校図書館などで見ることができる、本の裏表紙の内側に貼った小さなポケットに、返却期限のハンコを押したブックカードを入れるのが、懐かしいブラウン方式。今大勢を占めているのはバーコードのシールを貼っているもの。大館市立図書館はこの方式です。最近現れて徐々に増えているのが、本にICタグを貼り非接触かつまとめて読み取れる方式で、利用者自身が自分で貸出・返却処理もできるもの。近隣では花輪図書館がその例です。

こんな説明を始めたのは、ブラウン方式なら貸出履歴が歴然と分かるのに、と思ったからです。利用者の氏名などは残らないので個人情報漏えいの心配もありません。情報技術が高度化するに連れて情報のブラックボックス化が進むようで、何がなし不安を覚える今日この頃ですが、今さらこの傾向が後戻りすることはないのでしょうか。

さて、市立図書館に「誰にも借りられていない本」はどのくらいあるのか、展示は実現するのか、関係者の理解は得られるのか、全てはこれからです。

❖ 読書感想文コンクール募集の前に

今年度の大館市読書感想文コンクールの作品募集が7月15日（金）から始まります。

読書感想文と聞くと拒否反応を示す人が多いと思います。私も感想文を書くのは苦手な人で、変に取り繕った文章しか書けなかった記憶があります。自分のことはさておき、近年一般の部の応募数が一桁台に留まっていることもあり、なんとか読書感想文に興味を持ってもらえる術はないかと探してみました。

なにしろ今年で47回を数える伝統あるコンクールですから、図書館を預かるものとしては粛々と継続することが求められます。以前とは時代も違ってきていますが、願わくは少しずつでも盛り上げていきたいものです。

ということで、見つけました。読書感想文敬遠症によく効く本が2冊。

1冊目は、赤木かん子著『お父さんが教える読書感想文の書きかた』（自由国民社、2007年）。子ども向けなので何より字数が少ないのがいい。それでいて技術も考え方もすっきり整理して書かれています。技術の方は、段落を初めから分けるテンプレート（書式）が示されています。考え方は、「読書感想文は読書（読んだ本）の感想を書いた文」であり「感想文は感動文ではないのです」というところに、膝を叩くこと請け合いです。本の選び方4箇条、とくに「感動した本は使わない」に大納得です。大人にも（こそ？）役立ちます。

このシリーズには他にも、『お父さんが教える図書館の使いかた』（同、2014年）と『お父さんが教える作文の書きかた』（同、2014年）が出ています。3冊とも比内図書館で所蔵しています（『図書館の使いかた』は花矢図書館にもあります）。

2冊目は、藤原和博・重松清・橋本治という豪華執筆陣による『人生の教科書 [編集力をつける国語]』（ちくま文庫、2007年）。この中に特別講座として、重松清による「読書感想文が『苦手』なあなたへ」があります。これでステレオタイプな感想文イメージから脱却させてもらえます。また、序章にある〈日本の「国語の教科書」は戦後一貫して「道徳の教科書」だった〉という言明など、ものの見方を揺さぶる指摘が満載の本です。残念ながら市立図書館に所蔵はないので、至急手配して書架に置きます。読んでみてください。

なお、読書感想文コンクールの要項は市立図書館のHPでご覧いただけます。  
(陽)